

それぞれが「楽しく」あれかし

瀧田節子

(大学教員)

わが家は娘一家と同居の三世代六人家族。三人の孫たちとの日常を思い返しながら、感じたことをお伝えしたいと思います。

こんにちはベビー

冬休みに入っすぐの日曜日の未明、孫たちのママは出産のためにチチ（孫たちは自分の父親をこう呼びます）に付き添われて入院しました。お昼にしようとしたとき、無事女兒誕生の連絡。ママとチチのいない心細さとベビーが生まれる期待にドキドキの八歳のKと六歳のNは、安堵と喜びの笑顔に包まれま

した。ママの大きなおなかをさすりながら待ちに待った赤ちゃんに会える喜びに、興奮の二人でした。

赤ちゃんは、それはそれは小さくて、瞳が大きくて、まるでかぐや姫のようにキラキラと独立した人としておりました。

お姉ちゃんたちは、恐る恐るのぞき込み、初めての出会いをしました。両腕に抱かせてもらい、いのちの重みを体を受けとめていたように思います。

「赤ちゃんは、三日分のお弁当と水筒を持って生まれてくるの。生まれたばかりは、おっ

瀧田節子（たきたせつこ）

専門：造形表現教育。東京都の図画工作専科教諭を長く務める。筑波大学附属小学校教諭、お茶の水女子大学附属小学校講師を経て、現在は東洋大学、関東学院大学、清和大学短期大学部で非常勤講師を務めている。

ぱいも飲まず、『眠り姫』のように一日のほとんどを眠っているのよ」とママから聞いて、ビックリの二人。それから、最新の医療では、新生児は誕生のときの沐浴をしないのだそうですね。私もビックリでした。

ベビー退院後十日ほどは、沐浴時に驚くほどの皮膚アカが出ました。「わあ、脱皮してみたいー」。ぐんぐん大きくなります。

そういえば、私の子育てのバイブル、平井信義先生の著書『意欲と思いやりを育てる』（中央法規出版 一九八五年）には、〈赤ちゃんの姿、三つの変化〉として、この沐浴のことについて書いてありました。改めて読み返すと、新しい気付きにつながりました。

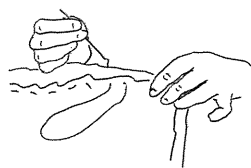


赤ちゃんへプレゼントしたい

お姉ちゃんになる二人の小学生たちは、昨年のクリスマス前から、毎日コツコツと針仕事。二年生はよだれかけ、一年生はフェルトのサイコロを、まだ見ぬ赤ちゃんへ、一針一針、拙い手で縫い、用意していました。

妹との初めての出会いに、思いを込めた作品を手にし、生まれたての妹に渡そうとしていたのは言うまでもありません。

二人は自分のお針箱を持っているので、いつでも縫い物遊びができます。フェルト地は折り紙のように材料箱にあるので、思い付くと猛然と何かを作り始めます。何枚かのフェルト布を重ねて周りをちくちくと縫うだけのものなどです。それでも、三つ編みした毛糸



を付けてポシエットに仕立てて使い、大満足したりしています。

今回感心したことは、八歳と六歳の孫たちが、自分ができることでベビ―を喜ばせたいと願い、行動したことでした。



子どものいのちの自主性

古い本をふと思いで出して、羽仁説子先生の著書『知的ママは育児が苦手―娘におくるおばあちゃんの才覚』(青春出版社 一九七七年)を開きました。(家庭生活にはリズムが大切である)という章に、明治生まれの羽仁説子氏は「私は育児から教育まで、五分五分の原則というものを、大切にしたいと考えます。」「のびるということ、のばすということも、それを誘導するのは母親であって、いつもあとの半分は子どものもの。子どものいのち

ちの自主性にふれていなくてはダメなのです。」と述べ、(五分五分の原則が子の意志を育てる)と次の章へ続けています。

八歳と六歳の孫たちの行動に「子どものいのちの自主性」の現れを感じたことは、孫育ての醍醐味であると思いました。

三十数年前の自分の子育てのときに、明治に生きた羽仁もと子氏(羽仁説子氏の母、自由学園創立者)の教えにご著書を通して出会い、赤子の立場に立ち、思いやること、母として人として毅然と生きることを学んだことも、改めて思い出されます。

「育てる者」を導く生まれたばかりの新生児

当時、子育てをする私は「育てる者」でした。「育てられる者」であったママは、今「育てる者」となっています。鯨岡峻著『育てられる者』から「育てる者へ」(日本放送出版協会 二〇〇二年)に「育てる者」を導いてく

れるのは、むしろ生まれたばかりの新生児です。」とあるように、私たち家族「育てる者」は、新生児の生命のリズムに合わせて生活することになりました。

赤ちゃんは発見している、と見つめる

生後ひと月を過ぎたベビーAは、手や足をバタバタさせたり、「あゝ、うゝ」と声を出したりして、一番の人気者です。「あつ、見てる」「のぞいたら笑ったあ」「こんな顔してるよ」と、二人のお姉ちゃんたちも百面相をしていきやかです。

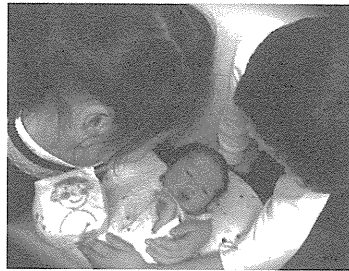
「ねえばあば、Aちゃんはおててを発見しているんだね」。一人遊びをしているAを見つめていたKが話し掛けてきました。Kはお姉ちゃんになると毎日緊張。他方、六歳のNは少々赤ちゃん返りをして、素直に自分を出しています。何しろNは、動物パンの鼻の部分

を食べてしまってから、「かわいそう」と二歳児のように大泣きをするような人ですから。

さて、八つと六つ
違いの三姉妹は、ど
のように付き合っ
ていくのでしょうか。
それぞれが楽しい毎
日であれかしと願う
のです。―続く―



▲2か月のAは
大福みたいになりました



▲ベビーと対面する姉二人